

# 発達障害児の居場所

## —その生成と移行の過程—

村井利香 明星大学心理相談センター 富田悠生 明星大学心理学部

キーワード：発達障害児、居場所、攻撃性、時間感覚

### 要約

児童期に居場所を持つことは、子どもに精神的な充実感を与え、対人関係における情緒的体験を促進する効果がある（藤田・大日方，2019）。それは、発達障害児にとっても同様である。

しかし、発達障害児は小学生の居場所感を構成する要素である『被受容感』、『安心感』、『充実感』、『自己存在感』（西中，2014）を感じられる場所を見つけることが難しい。なぜなら、発達障害児の他の子どもに関心を示さない、集団活動が苦手である、かんしゃくを起こすことが多いなどの特徴が影響するからである。

本稿では、AD/HDと診断された児童青年期のクライアントがプレイセラピーの場に居場所を見つけ、次第に居場所がクライアントの生活の場である部活や塾へと移行していった過程を報告し、それぞれの段階を考察した。クライアントは、経過の中で徐々にセラピストが信頼に値する人物であると改めて認識し、攻撃的な遊びを表出し始めた。次に、セラピストに攻撃性を持った自分自身を受けとめてもらう体験から、ありのままの自分でいられるプレイセラピーの場がクライアントの居場所となっていった。そして、居場所を見つけたクライアントは他者に目が向き始め、他者との心の交流はクライアントに時間感覚をもたらした。最後に、他者と時間を共有できるようになったクライアントは、居場所がプレイセラピーという場所から生活の場へと移行していった。

### I はじめに

飽田（1999）は、プレイセラピー（遊戯法）を相手が表現すること・語ることにひたすら関心を向け、それを心理学的に解明していく作業であり、こちらの心理学的専門性だけを頼りに、こころの問題に接近するこの作業は、心理学の中でもとりわけ純粋性の高い作業であると述べている。また、田中（2011）は、楽しく遊び、ただ子どもをしていることを許容し、発散させるだけのプレイセラピーは、極めて次元の低いものであり、お互いがどのような感覚を抱いているかを言葉にして明らかにし、暗々裏に分かり合っているとと思われることも、決めどころはしっかりと言葉でも共有して、クライアントなりの理解のストーリー

を作っていくことが必要であると述べている。そのように言葉でお互いの感覚を共有しあうことによって、クライアントは自分自身についての理解が深まり、プレイセラピーの場はクライアントが自分のありのままにいられる場所となる。それは、結果としてプレイセラピーの場が心の居場所としても機能していくことになると考えられる。

本稿では、AD/HDと診断された児童青年期のクライアントがプレイセラピーの場に居場所を見つけ、次第に居場所が部活や塾へと移行していった4年2か月（73回）に及ぶプレイセラピーの過程を報告する。そして、プレイセラピーが居場所として機能し、その機能が他の場所へと移行していく過程について考察した。

## II 事例の概要

インテーク時に小学校低学年だった男児のクライアントは、母親と姉、妹の4人家族で育った。出生時の体重は不明であり、幼少時の状況も良く分からない。母親には精神科的疾患があり加療中であったためか、クライアントが幼少の頃には、父母間で夫婦げんかが絶えず、何度か警察沙汰になることもあった。また、家の中は使用済みのおむつが山のようになっているなど、乳幼児にふさわしいように整えられた生活環境ではなかった。その後、クライアントは多くの親戚が住む敷地内の別棟に転居した。母親はしつけに非常に厳格であり、クライアントが就学前に、姉が妹の粗相に対して母親から殴打されるということがあった。母親は就労しており、クライアントは小学校に上がる頃から手がかかるために祖母に世話をされ、母親や姉妹の住む家に入りはするものの別棟の祖母宅で寝起きするようになった。父親は家に寄り付かなくなりその後離婚が成立したが、夫婦関係の事情について子どもたちは十分な説明を受けなかった。近隣に住む親戚たちはクライアントの面倒をみることに協力的であったが、クライアントにイライラさせられることもあったようである。クライアントは小学生の頃にAD/HDと診断され、服薬により一応学校では落ち着いていたが、授業中のおしゃべりや他児へのちょっかいなどが収まらなかった。児童福祉機関の職員が定期的に学校に訪問して経過をフォローしていた。心理相談室へは、公的機関の巡回相談員からプレイセラピーを勧められ、クライアントが将来暴力性を帯びることを恐れた祖母に連れられて来談した。理由は不明であるが、母親はクライアントがカウンセリングを受けることには消極的だった。

セラピストのクライアントに対する第一印象は、おっとりとしたおとなしい感じだった。控えめながらも徐々に自分の要求をはっきりと出してくることから、心の健康さを感じると同時に、どこかしら欠乏感を抱えているような様子が見え

た。素直で関係性を作る力はある、落ち着きのなさはうかがえなかったが、言語的説明はつたない面があった。学校の先生に、気持ちを汲んでもらえない不条理さをためているように見えた。

倫理的配慮：本事例は個人情報に配慮した上で論文化することについて、プレイセラピー終結後にクライアントに口頭で説明し、研究協力及び論文の公表に関する同意書に署名を得た。また事例の記述に際し、プライバシーの保護に留意した。

## III 面接経過

初回セッションにて、卓球やサッカーゲーム、刀を使ったチャンバラごっこ、2人野球などで遊んだ後、次回以降の面接設定を相談した。私の所属する機関の事情もあり、決められた曜日と時間を伝えたところ、彼は他の曜日が良いと言った。しかし、彼の希望の曜日ではなかったが、治療者や保護者の要望が優先され、結果として彼はこちらの提案を受け入れた。のちに保護者からの了解があったこともあり、週1回50分、プレイセラピー、固定された曜日と時間といった設定が決まった。

セッション開始から1か月後に会話の中で、自転車の補助輪や将棋の話が出た際に、彼が「補助輪って何？」や「将棋って何？」と聞いていたことに『小学4年生にしては色々な事を知らないのだな。』と私は違和感を覚えた。

私が彼のプレイセラピーで攻撃性を感じ始めたのは、セッション開始から3か月後に「(学校の)先生にこれが嫌だって伝えたのに何も変わらなかった。先生のバカヤロー。」と言いながらパンチキック(空気の入った自立する、起き上がりこぼしのような人形)を部屋の隅から隅まで宙を飛ぶように蹴りあってからだった。それまでは、カートや三輪車に乗ったり、エアホッケーやボードゲーム、卓球などをするが多かったが、それ以降はバランスボールを投げあったり、拳銃の打ち合いやチャンバラごっこをするなど攻撃的な

遊びが多くなっていった。

一方、彼とのコミュニケーションにおいては、私が学校行事の詳細を彼に聞いても要領を得ず、彼は困ったことがあっても私を頼らなかつた。また、彼の保護者から校外学習の持ち物がさっぱり分からなくて困ったことを聞くこともあった。

セッション開始から4か月後の13回目のセッションでは、セッションが終わった後に彼の保護者からこのまま状態が変わらないなら、プレイセラピーを隔週にしたいという申し出があった。保護者のいう『状態が変わらない』というのは、実生活に改善が見られないということらしい。私が彼に「(隔週にすることについて)君はどうなの?」と尋ねると、「忙しくて疲れちゃう。」とハッキリ語ってくれた。言語上はつたない説明だったが、私は彼も隔週を望んでいると受け取り、その次の14回目のセッションから隔週になった。だが、13回目と14回目のセッションでは、大型積木を縦に天井に届きそうなくらい積み上げて、その上にプラスチックのボールがたくさん入った大型のごごをのせ、最後にはバランスボールを当てて倒すという攻撃性が非常に強く出た遊びを行った。その後、彼にチックの症状が出始めた。この頃の彼は、卓球台の端にキャラクターの人形を立てて、ラケットで打ったゴムボールを人形に当てて落とすといった、私が攻撃性半分、創造性半分と思う遊びを作り出したり、通常は平面的にはめ込んで作る道路のおもちゃで、工夫を凝らして立体的な高低のある道路を作り、保護者に見てもらいたいとつぶやいたりした。一方で、彼との会話では、私が何を尋ねても「うーん。」とか「えーっと。」などの答えしか返ってこず、言語化が難しいようだった。彼の誕生日を聞いても正確に知らず、誕生月しか答えられなかった。また、自信がないような小さな声でボンボン話すので私には聞き取りにくいうえ、それ以前の会話とどういふ脈絡があるのか分からないことを話し出されることも多く、後で彼の話した内容を思い出そうとして

もよく思い出せないことが多かった。

セッション開始から約1年半が経過した頃、彼が学校や学童で性的なことを言ったり、友達のズボンを下ろすなどの問題行動を行っているということを伝え聞いた。その頃から、プレイセラピーで単に攻撃性が強い遊びではなく、私を直接攻撃する遊びが多くなった。そして、彼は通っているスポーツチームのコーチが嫌だと話し始めた。私がどう嫌なのかを聞くと、あまり試合に出してくれないと言う。しかしそれだけではないようで、説明するのは難しいと言う。その後、言いたいことを言葉ではっきり言わず、うやむやな感じでこちらにおわせたり、私が話しかけても無視したりを繰り返した。また、この頃に家族で旅行に行ったが、旅行先の地名だけでなく、そこにはどんな名所があったのかも覚えていなかった。この頃の彼は、花札や思考力を使うカードゲームなどの対戦型の遊びと、バランスボールでのキャッチボールやデコピンパンチなどエネルギーを発散する遊びをだいたい交互に行っていた。花札で遊ぶ際に、彼はいつも月の札を混同していた。私は「同じ花の絵が描いてあるのが同じ月の札だよ。」と毎回伝えたが、彼はなかなか覚えることができなかった。

セッション開始から約2年後の43回目のセッションで、彼は、スポーツチームのコーチが自分だけあからさまに差別するので友達がかばってくれること、コーチが「練習をしない」という理由で正当に実力を評価してくれないことなどを話した。私が、「今日はいろいろ嫌だと思うことを説明してくれるんだね。」と言うと、「いつも自分は説明が下手だからうまく説明できないけど、今日はできた。」と話した。

この頃までカンファレンスやスーパーヴィジョンで彼や彼の家族に対する印象を聞かれるたびに、私は『得体のしれない感じがする』と答えていた。なぜなら、私が彼の家庭について質問すると、彼はその都度違うことを答えたり、こちらの

質問に対して要領を得ない返答をしたりしていたからである。また、彼の母親はしつこく厳しくて、子どもを虐待すると聞いていたが、私が一度だけ実際に会った彼の母親は笑顔の素敵な、子どもに懐かれている人物であった。加えて、保護者が語る彼は、校外学習の持ち物が分からないほど頼りない人物であったが、私が見る彼は、プレイルームのおもちゃの電池が切れたときなどには私も気づいていなかったスペアの電池のありがたさを知っていて、細いドライバーを巧みに使って小さいねじのついた蓋を開けてさっそうと換えてくれるような頼りになるところもある人物だったからである。

その後、感染症拡大防止策の一環で学校が休校になった。その間も彼は家の都合で毎日学校に行っているという話をした。学童に行く児童は、学童が開くのが遅いからその前に休校している学校の校舎に行く。学校では給食も出る。でも、学校に行っている児童はクラスの半分もいない。彼が学校に行くことは、彼は母親に勝手に決められたと思っており嫌だけど仕方がないと思っている。「今まで嫌だと言っても（彼の意見を）聞いてもらったことがないので、嫌だと（母親に対しては）言わない。」と言っていた。

この後、当機関も感染症拡大防止の施策の影響を受け、3か月ほどプレイセラピーを行うことができなかった。この頃までに、保護者が行っていた親面接が保護者の都合で終結した。その間に新年度を迎え、彼は進級した。プレイセラピーが再開されて、私が「学校はどう？」と聞くと、「前年度とは違う先生だけど、嫌な担任だ。」と答えた。私が「どう嫌なの？」と聞くと、「女子ばかりひいきする。」と言った。また、前に所属していたスポーツチームはコーチが良くなくてみんなから不満が出て解散になったこと、今日は新しいスポーツチームを見に行くこと、新しいスポーツチームは練習が遅くまであるので嫌であることを話した。遅い時間にスポーツをやるのが嫌だっ

たら、母親にそう伝えれば良いのではないかと提案すると、スポーツをやるのは強制なので、また別のスポーツチームを探されると答えた。私が、嫌だったら他の保護者に助けを求めたりしないのかと聞いたら、彼は「言っても仕方ないからゲームとかしている。」と答えた。私が「ゲームとかで嫌なこと忘れるの？」と聞くと、「はい。」と答えた。彼と母親や他の保護者との関係性について尋ねても、これまでは無視が、聞き取れないようなボソボソしたしゃべり方で要領を得ない答えが返ってくるかだったので、これ程しっかりとした答えが返ってきたことに私は驚いた。この頃に彼が選んだ遊びは、思考力を使うカードゲームや、卓球、将棋など、私と1対1で向き合う対戦型のものが多かった。

面接開始から約2年半が経過した48回目のセッションから52回目のセッションでは、新しいスポーツクラブに入会した彼が、今のクラブのコーチは前のクラブのコーチみたいに嫌ではないと自分の意見をはっきり述べてきた。そのうえ、母親は勉強しなかったらゲームをさせてくれないと、母親に対して少々批判めいた発言もあった。私が彼の行っている学童について聞くと、友達や先生とそんなにしゃべらず、ただゲームをやったり、マンガを読んだりしていて、同学年の友達は、友達同士で遊んだりしていないと言ったり、スポーツチームには体験ではなく、正式に入会して楽しくやっていると教えてくれたり、現在の状況を私にも分かるように明確に答えてくれることが多かった。

しかし一方で、彼が「先週熱を出して部活に行けなかった。」と言ったので、私が「お医者さんに行った？風邪だったの？」と2回聞いたにもかかわらず、返答はなかったり、私が「いつまで夏休みの？」と聞いたら、彼は「えっと、あ？あ？」とろたえ、「いつだったかな？あと2週間もない。」と時間に関する意識があいまいな点が見えたりした。また、「最近話したいことは？」



と聞くと「ゲームやってる。」という答えが返ってきて、質問と返答のちぐはぐさを感じることもあった。この頃も遊びは、引き続き思考力を使うカードゲームや花札、将棋などの対戦ゲームを行った。

将棋で最後まで決着がつかなかった時に、「続きは次回やろうか。写真を撮っておこう。」と写真を撮って次回につなげたところ、次の回に彼は前回のことを覚えていて、スムーズに前回終えたところから将棋を始めることができた。また、それまで彼がカレンダーを見ることはほとんどなかったのに、カレンダーを見ていることがあり、私は少し驚いた。彼の中で少しずつ時間の流れが意識され始めていることを感じた。

面接開始から2年9か月が経過する52回目のセッションで、彼は修学旅行が楽しかったことを私に詳しく話した。

面接開始から約3年が経過する56回目のセッションでは、お年玉の使い道の話題になった。彼は、別に欲しいものとかないからというので、私が流行りのマンガとかを買ったりしないのか尋ねると、自分は管理できないから、買ってはいけないと母親から言われていると言った。私は、兄弟はマンガを持っていないのか尋ねると、持っているらしい。私が、「僕も欲しいとか思わないの?」と聞くと、彼は、読んだら元のところに戻すことができないと言う。自分の部屋がないのかを尋ねると、自分の部屋はない。教科書はいつもランドセルに入れっぱなしで、宿題もやっていないらしい。私が、アニメやマンガで自分と同じ年代の人が自分の部屋を持っていたら、自分の部屋が欲しいと思わないのかを尋ねたが、欲しいと思わないと言っていた。

小学校卒業まではスポーツクラブで続けていたスポーツを、中学校入学後は学校の部活で行うようになった。彼によると、部活の1年生の部員の中では彼が一番うまいそうで、同学年の部員より2年生の部員と仲が良いとのことだった。こ

の頃の遊びの内容は、ほぼ毎回将棋を行って、彼が勝つというものだった。たまに時間がある時は、将棋のほかに思考力を使うカードゲームや花札を行うこともあった。その頃もまた、私が「それってどういうこと?」と尋ねなければならないような話をすることもあったが、私が尋ねるとなるほどという答えが返ってくるのが多くなった。

セッション開始から4年が経過する頃、彼が体調を崩してセッションを欠席したり、他の予定と重なってセッションに来るのを忘れていたりすることが続いた。保護者からは、塾に行き始めて勉強に前向きな姿勢を示していることと、それに伴い忙しくなってきたことが告げられた。そして、久しぶりにセッションに現れた彼から、セッションを終了したいと提案された。彼に塾のことを聞くと、少人数制でこじんまりしていて、自習室もあり、最近彼はそこで勉強していると言っていた。彼にとって部活や塾が十分に彼の居場所として機能していることを確認し、私はそれを受け入れた。最終回のセッションでは将棋を行い、彼が勝って終わった。その後、彼と彼の保護者と一緒に4年に及ぶプレイセラピー経過を振り返り、セッションは終了した。

## Ⅳ 考察

### 1. 見立てと支援

クライアントの認知機能について、言葉でのコミュニケーションの不明瞭さから言語領域の能力はそれほど高くないことが推測された。また、花札で遊んでいる時に、しばしば同じ月の札を覚えられないことから、絵や記号などの非言語的な情報を正しく理解し、推理を行うことについてもそれ程得意ではないと思われた。しかし一方で、将棋ではたいていセラピストに勝利していたことを考慮すると、情報を記憶に一時的にとどめ、その情報を操作する能力には優れているようである。また、道具などを使いこなす手先の器用さの能力も、細いドライバーを巧みに使って小さいねじの

あるおもちゃの蓋を開けていたことから、高いものを持っていると考えられる。

クライアントの家庭は母親の強迫的性格から機能不全に陥っており、母親はクライアントが幼い頃から育見的関わりが不十分だった可能性が高い。また、母親は自身の母親と折り合いが悪く、常に反目しあっていた。そんな環境から、クライアントは自分が何か自己主張をするたびに家族がぎくしゃくするという経験を幼い頃から繰り返していたようである。言語能力や非言語からの推理能力がそれほど高くないクライアントにとっては、『なぜ家族がぎくしゃくするに至ったのか』を推測することが難しかったのではないだろうか。そのため無意識のうちに、あえて周りと深くかかわらないように、自分を主張しないようにと過ごしてきたと考えられる。それが、クライアントが持って生まれたAD/HD（注意欠如・多動症）の『課題への不注意』、『聞いていないような態度』、『課題を計画的にできない』、『しばしば忘れやすい』などの特性（Nussbaum, 2013）と相まって、学校などで先生の話をよく聞けない、自分のいる状況を判断できない、他人と関係を築けないなどの問題として現れていたと思われる。

このようなクライアントに対して、認知行動療法やソーシャルスキルトレーニングなどではなく、「自己感覚を育て、感情を扱う力を身に付け、心理的な傷つきを癒していく、子どもが育っていくための術（太田, 2018）」である遊びをセラピーに取り入れたプレイセラピーによって、クライアントなりのストーリーを作っていく方針での支援を行った。また、人格形成全体を支えることを意識した長いスパンでの発達も考慮した。

## 2. 面接経過

クライアントは、プレイセラピーが始まった当初から3か月目までは、セラピストに気を遣ってセラピストも楽しめる遊びを意識して選んでいたが、セラピストとの信頼関係が構築されること

により、1年半後ぐらいまでは攻撃性が強く出た遊びを続けて行うようになった。セッションの間隔が毎週から隔週に変更になる13回目と14回目のセッションでは、特に攻撃性が強く出た遊びを行っていた。治療経過でこのような判断を行ったが、彼は怒りを示しており、このような判断が良かったのかは分からない。この時の決定は、クライアントの保護者も関わった3者間で行われるものであったことから、これまで家庭で自己主張をするとなぜだか分からないが家族間に波風が立つという経験をしていたクライアントは、今回も自己主張をするとなぜだか分からないが母親と保護者の間で口論が起こったりするのではないかと危惧し、自分自身でも意識しないうちに本当の気持ちを表出しなかったのではないかと考察する。そのようなことから、クライアントは上辺では隔週になっても良いと言っていたが、本心では嫌だったと考えられる。その後、クライアントが正当に評価されていないと感じていた、通っていたスポーツチームが解散になり、セラピー開始から約2年半後に別のチームに移ったことでそこがクライアントを認めてくれる居場所となった。するとプレイセラピーで行う遊びもセラピストと1対1で対戦するものを選ぶようになっていった。そして、2年9か月が過ぎた頃、将棋の対局を2週にわたって行うことができたり、カレンダーに興味を持ったり、学校行事の内容を振り返って説明できるなど時間の軸がしっかりしていった。

### a. 攻撃性

クライアントは、セッション開始から3か月後にパンチキックを思い切り蹴るといった攻撃的な遊びを始めだした。飽田（1999）は、プレイセラピーは攻撃的な感情を表現することが課題の子どもにとって有効であると述べている。

飽田の示すプレイセラピーの流れに沿うと、まずクライアントがセラピストに対して「相手が自分を裏切ったり、途中で嫌気がさして放り出した

り、親切そうに見えてその実それが悪の道への誘いであったりということがない、信頼に足る人間か否かの確認の作業 (p.161)」を行ったうえで、クライアントの「警戒心や緊張感が共に過ごす時間の中で薄らいでいき、担当者を安心できる存在として認められるように (p.149)」なり、“関係が成立する。”この頃までにクライアントはセラピストを信頼に足る人間と判断し、警戒心や緊張感が薄らぐだけの時間を共に過ごしたことにより、『関係が成立』したのではないだろうか。そして、心のうちに秘めていた攻撃性をプレイセラピーで出し始めたと考えられる。

この頃セラピストがクライアントに対して感じていた『得体の知れなさ』は、何も説明されないまま両親が離婚するという経験をしていたクライアントが周りの人間関係に対して感じていた『得体の知れなさ』を、セラピストが感じさせられていた可能性がある。つまり、クライアントが外界他者に抱いていた『得体の知れなさ』がセラピストに投影されたものではなかったのだろうか。そして、クライアントが感じていた得体のしれない人間関係の中であっても、分かり合える相手の一人としてセラピストとの関係を深めていったと推測される。

怒りの感情を抱くことは、その個人に自尊感情が内在している確かな証拠でもある。それゆえに、怒りの気持ちを抱いている自分を認めることは、自分の自尊感情を確かめたり、それを育てたりすることに直結する (園田, 2021)。クライアントは、自分の中にある怒りを攻撃的な遊びとして表出することで自身のうちにある怒りの感情を認識し、それをセラピストが支えることでクライアントの中に自尊感情が芽生えてきた可能性がある。その上で、遊びやゲームのルールの中で、怒りや衝撃性の行動がルールにのっとってコントロールされながら表出されるようになったと考えられる。

## b. 時間との関係

時間軸の認知について、クライアントは、自分の誕生日が答えられない、学校行事がいつあるかが直前になっても分からないということがあった。杉山 (2007) は虐待の後遺症として、つらい体験を意識や記憶から切り離すために解離症状が起きることがあると述べている。クライアントの時間軸の認知の混乱は、幼少期に不適切な環境で養育されたり夫婦の深刻な喧嘩が繰り返されたりしていたこと、母親がしつけのために手を挙げることもあったことから、解離症状の中の記憶障害様の状態を示していた可能性がある。また、成育環境から、いつも目の前に起こることにアンテナを張って生活していたので、時間の中に自分を位置付けることができず、時間軸が混沌としたものにならざるを得なかったとも考えられる。

セッション開始から2年9か月経過するあたりから、クライアントがルールにのっとったフェアな遊びである思考力を使うカードゲームや、卓球、将棋など1対1のゲームをじっくり行うようになってきたのは、今までは大人ときちんと関わるのが少なかったために周りのことに注意が向いていなかったクライアントが、セラピストとの間での協働で行う遊びによって、セラピストの存在にも注意を向けられるようになり、自分以外のものに注意を向けられるようになってきた表れと捉えることができる。その結果、クライアントの中でそれまでは細切れでばらばらに配列されていた記憶を第三者の立場から客観的にとらえる余裕が生まれ、時間軸に沿って連続した記憶に生成することができるようになったのではないだろうか。その結果、それまでは集団についていだけでその後内容の思い出せなかった学校での集団行動が、修学旅行では集団で参加するイベントを実感し、楽しむことができたのであろう。しかもそれを良い記憶として後々思い出せていたことを意味深く感じる。

## c. 居場所

『(心の)居場所』とは、1990年代に文部省 (現:

文部科学省)が登校拒否(不登校)問題について、学校が児童生徒の心の居場所としての役割を果たすことをめざしたことから用いられるようになった概念である。2003年の文部科学省の報告では、『心の居場所』は「自己が大切にされている、認められている等の存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる」場所とされている。つまり、『居場所』に『心の』がつくことにより、単純に『存在を許されたスペース』とは区別された意味合いを含んでいる。本稿では『居場所』とは、この『心の居場所』の意味を持つ言葉として使用している。

クライアントは、自宅に自室がなくランドセルなどは自宅のリビングに置いていた。これでは絶えず家族の誰かから監視されているようで、自宅でリラックスしづらかったのではないだろうか。これでは家族が集う自宅に『自己が大切にされていると実感し、精神的な充実感が得られる場所』があったと考えることは難しい。西中(2014)は、小学生の居場所感を構成する要素として、『被受容感』、『安心感』、『充実感』、『自己存在感』の4因子を見いだしている。プレイセラピーでは、セラピストから肯定的で共感的な関心を向けられることによる『被受容感』、枠によって守られている『安心感』、思い切り体を動かして生き生きと活動できる『充実感』、1対1でセラピーを行うことによる『自己存在感』と、上記4因子のすべてを満たしている。したがって、プレイセラピーの場がクライアントにとっての居場所となったと推測することが可能である。

藤田と大日方(2019)は、児童期に居場所を持つことは親和動機つまり対人感情を高める効果があると考えられると述べている。また、藤田らは小学生時の居場所は家族と友達が拮抗して多いが、中学生さらに高校生になるにつれて家族が減少し、友だちは維持され、また部活・クラブや学校の仲間関係が増えてくることも示している。家族の代わりにプレイセラピーの場が居場所となったことでクライアントの対人感情が高まり、2つ

めのスポーツクラブに入会したあたりからクライアントはチームでうまくやっていたのではないだろうか。そして、中学生になってからも部活を自らの居場所にすることができたのだと考えられる。

## V おわりに

本稿では、発達障害をもつクライアントが、肯定的で共感的な関心を示すセラピストとともに遊ぶプレイセラピーによって人格全体を支えられ、まずはセラピストを信頼することにより攻撃性を表し、プレイルームが居場所となり、それまではばらばらであった時間が軸に沿って認識され始め、生活の場が居場所になる過程を記述した。今回の考察は一事例による仮説の検討であるが、クライアントとセラピストが抱いた感覚をしっかりと言葉で共有して、クライアントなりの理解が進んだことにより心の健康に資することができた。今後も臨床事例を通じた考察を続けていく必要がある。

## 文献

- 飽田典子(1999) 遊戯法 子どもの心理臨床入門. 新曜社.
- 藤田依久子・大日方重利(2019) 児童期から青年中期にわたる居場所の発達の様相～居場所の心理構造の理解を目指して～. 安田女子大学大学院紀要, 24, 55-70.
- 文部科学省(2012) 国立教育政策研究所生徒指導リーフ「『絆づくり』と『居場所づくり』」.
- 文部科学省(2003) 不登校問題に関する調査研究協力者会議「今後の不登校への対応の在り方について(報告)」.
- 文部省(1992) 学校不適応対策調査研究協力者会議「登校拒否(不登校)問題についてー児童生徒の『心の居場所』づくりをめざしてー(報告)」.
- 西中華子(2014) 心理学的観点および学校教育



- 的観点から検討した小学生の居場所感：小学生の居場所感の構造と学年差および性差の検討．発達心理学研究，25(4)，466-476.
- Nussbaum, Abraham M. (2013). The Pocket Guide to the DSM-5 Diagnostic Exam. 染矢俊幸・北村秀明（訳）(2015). DSM-5 診断面接ポケットマニュアル．高橋三郎（監訳）. 医学書院．
- 太田智佐子（2018）発達障害児のプレイセラピー．精神療法，44(2)，181-186.
- 園田雅代（2021）アサーティブなアンガーマネジメント．精神療法，増刊(8)，110-115.
- 杉山登志郎（2007）発達障害の子どもたち．講談社．
- 田中千穂子（2011）プレイセラピーへの手びき—関係の綾をどう読みとるか—．日本評論社

---

The development of Ibasho for a child with developmental difficulties

MURAI, Rika

Center of Clinical Psychology, Meisei University

TOMITA, Yuki

Department of Psychology, Meisei University

## Abstract

Children, including those with developmental difficulties, experience mental fulfillment and enhance their interpersonal emotions by possessing Ibasho, which may be defined as a sense of own place, in childhood (Fujita and Oohinata, 2019.) Among upper elementary school children, Ibasho is characterized by four factors: sense of perceived acceptance, sense of relief, sense of fulfillment, and sense of self-affirmation. However, children with developmental difficulties tend to experience difficulty discovering Ibasho because they usually have no interest in other children, experience difficulties in groups and may exhibit explosive anger. In this article, the progress of a child client diagnosed with AD/HD to develop Ibasho in play therapy is revealed. Furthermore, how the child employed Ibasho in other situations such as club activities and private tutoring is explored. In addition, each step in the child's development of Ibasho is discussed. By trusting his therapist gradually, the child allowed the therapist to encounter and accept his aggression in play therapy. This enabled him to experience play therapy as Ibasho. When the child discovered his Ibasho, he became interested in others, which helped him acquire a sense of time flowing.

**Key Words** : child with developmental difficulties, Ibasho, aggression, sense of time flowing

---